

延慶本『平家物語』鹿谷事件覚書

生 形 貴 重

1 はじめに・行綱密告

安元三年五月二十九日、多田藏人源行綱は清盛のもとに参上し、後白河法皇と成親ら法皇側近による反平氏クーデター計画を清盛に告げた。行綱は「若此事漏ヌル物ナラバ、誅セラレム事無疑。甲斐ナキ命コソ大切ナレ。他人ノ口ヨリ漏レヌ先ニ返中シテ、命生ナム」^①（延慶本第一末七「多田藏人行綱仲言ノ事」という心境で清盛に計画を密告したのであるから、おそらく彼の清盛への密告が「他人ノ口ヨリ漏レヌ先」であるかどうか、彼の心の中の一歩の不安であったに違いない。

物語中の人物の心境を必要以上に穿鑿する読み方が、『平家物語』の読みとして相応しいかどうかいささか疑問だが、クーデター計画のターゲットとして狙いを定めた相手に、クーデターの行動部隊の

責任者の行綱が計画を告げるのであるから、清盛がその計画について少しでも関知しているかどうかは、行綱にとつてはもつとも重大な関心事であつたろうと思われる。「：院中ノ人々兵具ヲト、ノへ、軍兵ヲ召集ラル、事ヲバ、知食レテ候ヤラム」という行綱の清盛への語り出しの言葉には、おそらく清盛がどの程度鹿谷の計画を知っているのかを瀬踏みせんとする行綱の意図もあつたと解釈してよいだろう。

不安に満ちた行綱の言葉に返された清盛の「イサ、ソレハ山ノ大衆ヲ可被賣トコソ承レ」という返答は、行綱の密告が「他人ノ口ヨリ漏レヌ先」であつたことを行綱に知らせ、彼の心を安堵させたことであろう。

ところで、この清盛の一言は、西光法師の子息加賀守師高が加賀国で起こした白山末寺宇河寺との抗争事件以来の物語の流れ、すな

わち白山事件から山門騒動事件へという物語の流れを、再び鹿谷事件の物語に収斂する役割も果たしていることに注意したい。そもそも、行綱の密告の語り出しが「成親卿ハ山門ノ騒動ニ依テ、私ノ宿意ヲバ押ラレケリ。ソモ内議支度ハサマノナリケレドモ、謾勢計ニテ其事可叶トモミヘザリケリ。其中ニ多田藏人行綱サシモ契深タノマレタリケルガ、此事無益ナリト思心付ニケリ」という文から始まっているのであるから、鹿谷の謀議の場（延慶本第一本二十二「成親卿人々語テ鹿谷ニ寄会事」）以降、一見物語の流れを中断するかに見えた白山事件から山門騒動事件の物語の流れは、はやく梶原正昭氏が指摘したように、西光法師というもう一人の鹿谷事件の首謀者を強く意識した構想のもとで、成親を視点にして語り出された鹿谷事件の叙述に収斂されるべく描かれたものと考えられる。鹿谷事件の首謀者成親の運命を主に語る鹿谷事件の叙述の前半部には、成親と西光法師とを強く意識した構想力が物語に潜在しているといえるだろう。

さて、右の清盛の行綱への返答は、山門騒動事件のためにクーデター計画が幸いにしてカモフラージュされていたであろうことも推測させる。「情ラ平家ノ繁唱スル有様ヲ見ルニ、当時暫ク難傾。大納言ノ語ハレタル兵イケ程ナシ」という判断で密告に傾いた行綱の心には、清盛のこの返答で複雑な動揺とためらいが生じていたかも

しれない。しかし、清盛の前に跪く行綱には、すでに密告の道しが残されていない。真相を知らされた清盛の言葉を見てみよう。

保元平治ヨリ以来、君ノ御為ニ命ヲ捨ル事既ニ度々也。人々イカニ申トモ、キミ君ニテ渡ラセ給ハズ、争カ入道ヲバ子々孫々マデモ捨サセ給ベキ。乍恐君モクヤシシクコソ渡ラセ給ハムズラメ。抑此事ハ院ハ一定被知食タルカ

成親の私憤に端を発した鹿谷事件であったが、物語作者はこの事件を清盛と後白河との対立という構図でもって描こうとする構想をここに明確に示しているといえるだろう。法皇の側近が俊寛僧都の山荘でなにを言おうが、清盛にとつて後白河法皇がこの謀議にゴーストを出していることがなよりの憤慨の種であったのである。語り系諸本の本文が、右の清盛の言葉の最後の部分を「さてそれをば法皇もしろしめされたるか」（寛一本）^③と略述して記すのは、瞬時にして事件の本質を見抜いた清盛の眼力を示すものとも解せられるが、むしろ表現のレベルにおいてその構想を際立たせるものであるといえるのではないだろうか。

計画を知らされてたちまちに一門の人々を召集し（延慶本第一末八「太政入道軍兵被催集事」）、翌朝早く法皇のもとに使者を送り、側近逮捕の知らせをすとともに、前夜の行綱の密告の当否を法皇の反応から推測する清盛を「平家物語」諸本は見事に描き出してい

るが（同九「太政入道院御所へ使ヲ進ル事」）、それもこの事件を清盛と後白河法皇との対立の構図で描こうとする物語の構想のもたらすものであった。

ところで、『平家物語』の基本的な骨組みとなる構想は、末法の世において神仏の加護を得た武門（＝日本国大将軍）が院と互いに助け合う世界を理想とする国家観からもたらされており、作品の構造を形作る説話的な文脈の基層にその構想が認められるのではないかという事を、筆者は繰り返し論じてきた。そして、そのような視点で延慶本『平家物語』を眺めたとき、鹿谷事件の直前の殿下乗合事件が、この世界を支える院と武門（平氏）という二本の柱の反目の始まりで、鹿谷の謀議は、殿下乗合事件の冒頭で語られた「君モ御誠モナシ」（延慶本第一本十五「近習之人々平家ヲ嫉妬事」）の「御誠」であるということを前稿で論じた。⑦そのような観点に立てば、『平家物語』における鹿谷事件は、清盛による法皇の「御誠」への反撃として構想されているといえるだろう。とすれば、鹿谷事件によって、院と日本国大将軍たるべき清盛とが決定的な対立を生じたという物語の構想は、少なくとも『平家物語』が十二巻の形を整える成立の時点で、相当創造的な内在的文学性として機能したのではないかと思われる。つまり、院と清盛との対立の構図を支える構想は、多様な資料や説話的な素材（『平家物語』の前段階の物語

や説話）などを物語の世界に収斂する内在的な力とも考えられる。

本稿は、そのような私の構想論の見通しに立って、清盛と後白河法皇との対立の構図の彼方に、かすかに想像される物語形成の一面を、鹿谷の謀議の場と成親逮捕の場から考えようとするものである。

2 行綱密告物語の可能性・行綱と五十端の布

清盛に鹿谷の謀議の次第を密告した行綱が清盛邸をあとにする場面を、延慶本は次のように描いている。

入道大声ニテ侍共ヲヨビテ、匍リシカラレケル気色、門外マデ聞ヘケレバ、行綱慥ナル証人ニモノ立トテ、穴怖シトテ、野ニ火ヲ付タル心地シテ、人モヲハヌニ取袴シテ、急ギ馳帰リヌ。

（延慶本第一末七「多田藏人行綱仲言ノ事」）

寛一本などの語り系諸本も右とほぼ同様に、「入道大に驚き、大声をもって侍共呼の、しり給ふ事、聞もおびた、し。行綱なまじひなる事申出して、証人にやひかれんず覽とおそろしさに、大野に火はなつたる心ちして、人も追はぬに、とり袴して、急ぎ門外へぞにげ出ける。」（寛一本巻第二「西光被斬」と、右とほぼ同文で「行綱の「取袴」姿が描かれる。密告を決意するにいたる行綱の姿も、「目打シバダ、キテ居タリケルガ」（延慶本）「目うちしばだ、いてゐたりけるが」（寛一本）と描かれているのだから、威風堂々とし

た清盛と対照させるために、行綱を少し戯画化せんとする意図が物語に潜在しているのかもしれないが、むしろ諸本の記事に共通する句として、右の行綱の戯画的な帰宅の姿に注意してみたい。

筆者はかつて、諸本の共通句の彼方に、『平家物語』の前段階に存在したであろう物語伝承を想定することが可能であることを論じたが、この行綱の密告の場面も、本来ならば他人の目をはばかる事実から生まれているはずであるので、右のような物語の表現が成立するには、『平家物語』作者の技量に帰することのできない物語伝承の前提的存在が想定されるべきだと思ふのである。

この点に注意しながら行綱の密告の場を延慶本で見ると、行綱の密告の物語には、行綱をクーデターの部隊長として謀議の仲間を引き入れた成親から贈られた五十端の布の事が常に意識されて描かれていることに注目される。

つまり、行綱が清盛にクーデターの計画を密告した折りには、「日来月来、新大納言ヲ始トシテ、俊寛ガ鹿谷ノ山庄ニテヨリアヒく内議支度シケル事、「其レハトコソ申候シカ、カクコソ申候シカ」ト、人ノ吉事云タルヲバ我申タリシト云、我悪口シタリシヲバ人ノ申タルニ語リナシ、五十端ノ布ノ事ヲバ一端モ云出サズ、有ノマ、ニハ指過テ」というように、明らかに鹿谷での謀議の場を受け継ぐ形で五十端の布のことが語られている。語り本系の諸本は、この

五十端の布についてはここでは触れていないが、長門本・盛衰記ともにこの句は共通している。

また、密告を決意する時の右に触れた「目打シバダ、キテ居タリケル」場面でも、その直前には「サテ弓袋ノ料ニ新大納言ヨリ得タリケル五十端ノ布共、直垂小袴に裁縫テ、家子郎等ニキセツ、」と五十端の布が語られる。この点は諸本ほぼ類句である。

そこで、この五十端の布について見てみると、語り系諸本においては、成親が行綱に手渡す場面は、鹿谷の謀議の場を語り終えた後ろに、「新大納言成親は、多田藏人行綱をよふで、「御辺をば、一方の大将に憑なり。此事しおほせつるものならば、国をも庄をも所望によるべし。先弓袋の料に」とて、白布五十端送られたり」(寛一本巻第一「俊寛沙汰 鵜川軍」と、ほぼ共通して語られ、俊寛の出自記事と併置されている。しかし、延慶本では、行綱が成親から贈られた五十端の布の記事については、語り系諸本と異なって、鹿谷の謀議の場面での酒宴の場の前に置かれるのである。

或時、彼人々俊寛ガ坊ニ寄合テ終日ニ酒宴シテ遊ケルニ、酒盛半ニ成テ万ツ興有ケルニ、多田藏人が前ニ盃流留タリ。新大納言、青侍一人招キ寄テサ、ヤキケレバ、程ナク清ゲナル長櫃一合、梶ノ上ニカキスヘタリリ。尋常ナル白布五十端取出テ、ヤガテ多田藏人が前ニ置セテ、大納言目カケテ「日来談義シ申ツ

ル事、大将ニハ一向御辺ヲ憑奉ル。其弓袋料ニ進。今一度候バヤ」ト云タリケレバ、行綱畏テ、布ニ手打係テ押ノケ、レバ、郎等ヨリテ取テケリ。

〔延慶本第一本二十一「成親卿人々語テ鹿谷ニ寄会事」〕

語り系諸本がこの記事を略述して酒宴の場の後ろに置いたのは、おそらく鹿谷の謀議の場を酒宴の場面に集中して描き、そこに成親・俊寛・康頼・西光^⑩、そして法皇・静憲を一挙に配置して、それぞれに個性ある一言を語らせて、後の物語の伏線とする意図からである。語り系諸本は、鹿谷の謀議を酒宴の場に集中的に描こうとするのである。

しかし考えてみれば、クーデターの謀議が酒宴の猿楽で描かれるのは、謀議の内容とはなはだ不釣り合いであって、やはり最初に攻撃部隊の主力を担う行綱が首謀者成親の誘いによって計画に加えられると云う場面があつてこそ謀議の場となるのであるから、延慶本の本文がもっともそれに相応しいといえよう。

右のように考えると、行綱が成親から贈られた五十端の布は、延慶本においては謀議の物語が成り立つための重要な要素であり、行綱が密告を決意する時にも、また清盛に密告する記事にも、つねに行綱の心境を物語るものとして描かれるのはむしろ当然であつたといえるだろう。

延慶本『平家物語』鹿谷事件覚書

ところで、この五十端の布については、『愚管抄』^⑪に記された鹿谷事件の記事にも、注目すべき共通した記事がある。

：アマリニ平家ノ世ノマ、ナルヲウラヤムカニクムカ、叡慮ヲイカニ見ケルニカシテ、東山辺ニ鹿谷ト云所ニ静賢法印トテ、法勝寺ノ前執行、信西ガ子ノ法師アリケルハ、蓮華王院ノ執行ニテ深クメシツカイケル。萬ノ事思ヒ知リテ引イリツ、マコトノ人ニテアリケレバ、コレヲ又院モ平相国モ用テ、物ナド云アハセケルガ、イサ、カ山莊ヲ造リタリケル所へ、御幸ノナリシケル。コノ閑所ニテ御幸ノ次ニ、成親・西光・俊寛ナド聚リテ、ヤウクノ議ヲシケルト云事ノ聞エケル。コレハ一定ノ説ハ知ネドモ、満仲ガ末孫ニ多田蔵人行綱ト云シ者ヲ召テ、
「用意シテ候へ」トテ白シルシノ料ニ、宇治布三十段タビタリケルヲ持テ、平相国ハ世ノ事シオホセタリト思ヒテ出家シテ、摂津国ノ福原ト云所ニ常ニハアリケル。ソレヘモテ行テ、
「カ、ル事コソ候へ」ト告ケレバ、ソノ返事ヲバイハデ、布バカリヲバトリテツボニテ焼捨テ後、京ニ上リテ、：

〔愚管抄〕巻第五)

『愚管抄』の鹿谷事件記事全体についても、『平家物語』とりわけ延慶本との見過ごすことのできない共通性については、稿を改めて論じなければならぬところだが、右の記事の範囲だけでも、たと

えば静憲について延慶本が、

其_レ静憲法印ト申シケル人ハ、故少納言信西ガ子息也。万事思知テ振舞人ニテ有ケレバ、平相国モ殊ニ用テ、世中ノ事共時々云合セラレケリ。法皇ノ御気色モヨクテ、蓮華王院執行ニモナサレナドシテ、天下ノ御政常ニ被仰ケルニ……

(延慶本第一本二十一「成親卿人々語テ鹿谷ニ寄会事」)と記し、一重傍線部に示すように共通した本文関係が存在する。^⑬その「愚管抄」の記事において、行綱の密告の部分を見ると、二重傍線部に示したように、(1) 行綱の成親から贈られた布の事が謀議に誘われたときに与えられたものであること、(2) その布が密告の証として清盛のところに持参されたものであること、(3) 清盛が怒りに絶えず即座に焼き捨てたことが語られている。延慶本は、(1) は共通しているが、(2) (3) については同じではない。また、清盛の館も「愚管抄」では福原とされる。^⑭

しかし、注意したいのは、「愚管抄」の行綱密告の記事が「コレハ一定ノ説ハ知ネドモ」として書き出されている点である。つまり、この慈円の筆致は、この行綱密告記事が若干物語的な資料によって知り得たことであることを暗示していないだろうか。慈円にあって、行綱の密告によって鹿谷事件が露見したことは周知のところであったが、そのきっかけとなった行綱の密告のドラマについては、

その資料が物語的なものであったことを「コレハ一定ノ説ハ知ネドモ」という書きぶりが暗示しているように思われる。そのように考えると、右の(1) (2) (3) の微妙な共通性とずれとの彼方に、慈円と『平家物語』作者とが共通して参照した行綱の密告の物語的資料が存在したのではないかと思われるのである。

延慶本は、(2) にあるように、密告の場では行綱は布の事を全く語らなかつたが、その事が自らを正当化する文脈となっている点では、布を証拠として差し出す「愚管抄」の形と一つのヴァリエーションとしてとらえられよう。

しかも、注目しておきたいのは(3)の部分である。本節の始めに触れたように、「平家物語」の行綱には、きわめて戯画化された印象が拭えない。「穴怖シトテ、野ニ火ヲ付タル心地シテ、人モヲハヌニ取袴シテ、急ギ馳帰リヌ」という描かれ方は、「日来談義申ツル事、大将ニハ一向御辺ヲ憑奉ル」として首謀者から信頼される源氏の武士としてはいささか不釣り合いの感じがするのだ。しかし、「愚管抄」の参照した「一定ノ説ハ知」られぬ物語が、その布を怒りに絶えずに清盛が焼き捨てたとしていたならば、延慶本はじめ『平家物語』諸本が語る「穴怖シトテ、野ニ火ヲ付タル心地」や「人モヲハヌニ取袴」する行綱の姿がなにに由来してできあがったかが説明できるのではないだろうか。「ソノ返事ヲバイハデ、布バ

カリヲバトリテツボニテ焼捨テ」(『愚管抄』)た清盛の激怒に恐れおののく行綱の心境が、『平家物語』と『愚管抄』の共通資料におそらく描かれており、それが『平家物語』の「野二火ヲ付タル心地」の行綱の取捨姿の原型としてあったのではなからうかと考えるのである。弓袋の料として贈られた布を重要な小道具として展開する行綱の密告の物語的な伝承が、『愚管抄』と『平家物語』の成立の彼方に透けて見えるように思われるのである。『平家物語』は、行綱の密告の物語を、清盛(日本国大将軍たるべき人)と法皇との対立という構図のもとに、「代ノ乱」(延慶本第一本十五「近習之人々平家ヲ嫉妬事」)の発展として鹿谷事件に組み入れたと想像出来る。

3 成親逮捕拷問の物語・伝承と物語の構想

かつて武久 堅氏は、鹿谷事件を描く『平家物語』の本文の彼方に、「大納言物語」とも称すべき成親の物語伝承が存在するのである^⑭ことを、成親の呼称を分析する中から論じられた。本稿が右に想定した行綱の密告の物語伝承も、氏の想定する成親の物語伝承の一部になつていたかも知れないし、あるいは信西の子息静憲の見聞譚から発生した説話かも知れない。^⑮氏はまた、「大納言物語」と称すべき物語伝承が、十二巻本の『平家物語』の成立の段階で、宗盛を強調した官位争いの構想の下に叙述されていることを指摘されてい

る。氏の論旨に異論はないが、私は、『平家物語』が資料とした鹿谷事件を伝える物語的な伝承(おそらく成親を主人公とした伝承)が、『愚管抄』と共通資料の關係にあり、『平家物語』は日本国大将軍と法皇という世界を支える二つの柱の対立の構図の中に、その伝承を探り入れていることを強調しておきたいのだ。

たとえば、『平家物語』における成親は清盛に召されて逮捕・拘禁されるが、その成親の逮捕の記事の中で、『平家物語』諸本には少し不自然と思える場面がある。それは、清盛直接の尋問にもかかわらず、「人ノ讒言ニテゾ候ラン」と罪を否認する成親に腹を据えかねた清盛が、西光の白状を成親に投げつけた後の場面である。

清盛は部下の侍に成親を坪に引き下ろして拷問せよと命じる。しかし、延慶本は、「元ヨリ情アル者」の季貞がそのとき成親に「入道ノキカセ給候ヤウニ、只御声ヲ立テラメカセ給へ」とささやき、いわば「やらせ」の拷問をする。ところが、物語はそのやらせの拷問に引き続いて、「其ノ有様目モアテラレズ。地獄ニテ獄卒阿坊羅利ノ淨頗梨ノ鏡ニ罪人ヲ引向テ：(中略)：刑罰ヲ行ラムモカクヤト覚テ無慚也」(延慶本第一末十一「新大納言ヲ痛メ奉ル事」と、成親の姿を地獄の罪人の悲惨な姿にたとえ、中国の先例を述べた後に再び、「唐朝ニモ不限、我朝ニモ保元平治ノ比ハ浅猿カリシ事共モ有ゾカシ。新大納言一人ニモ限ルマジ。コハイカ、ハセンズルト、

人歎アヘリ」(延慶本第一末十二「新大納言ヲ痛メ奉ル事」と、拷問のさびしさを強調する。

もちろん、その後「カクシテ季貞ノキニケリ。大納言半死半生ニゾミヘラレケル」とまとめられているこの場面を、やらせの拷問だからこそそういう叙述でユーモラスなのだと思ふこともできるかも知れないが、やはり漢文調の唱導的な文体に突如文体が変化するこの場面は、一方で季貞に声だけ出してくださいとたのまれた成親の拷問への評言としては不自然だろう。つまり、ここにも、本来は厳しく拷問される成親を描いていた素材が前提として想像され、それを物語の構想上成親を痛めつけない形に『平家物語』が叙述したのではないかという想定が成り立つのである。

今、『愚管抄』を見ると次のように語られている。

コノ西光ガ預切ル前ノ日、(一)成親ノ大納言ヲバヨビテ、
(二)盛俊ト云チカラアル郎従、盛国ガ子ニテアリキ、ソレシ
テイダキテ打フセテ、(三)ヒキシバリテ部屋ニ押籠テケリ

〔『愚管抄』巻第五 カツコ数字筆者記す〕

『平家物語』諸本も(一)の「成親ノ大納言ヲバヨビテ」彼を逮捕したことは共通している。また、(三)の「ヒキシバリテ部屋ニ押籠」めた点も、「天ニモ上ズ地ニモツケズ、中ニク、ツテ、上ヘ引ノボセ奉リ、一間ナル所ニヲシコメツ」(延慶本第一末十「新大

納言召取事」と『愚管抄』と共通する。(二)は盛俊としてあるので、成親を拷問した人物が延慶本と異なるが、『平家物語』諸本でも語り本系が「経遠・兼康」とするなど郎等の人名は可変的なものであるから、短い成親逮捕の『愚管抄』の記述だが、成親が清盛に呼ばれ、清盛の郎等で力のある者が成親を「打フセ」、縛り付けて部屋に監禁したという(一)―(三)の成親逮捕の物語的な伝承の存在が想定される。『平家物語』との共通性からも、おそらく二者のかなたに成親逮捕の物語的な伝承は、想定が十分に可能だと考えられる。拷問される成親の悲惨な姿に対する同情を、地獄の責め苦の例えと本朝・異朝の先例に比して描きつつ、一方で「カクシテ季貞ノキニケリ。大納言半死半生ニゾミヘラレケル」というように、やらせとして拷問を描く『平家物語』の記事の不自然さから、呼び出して逮捕した成親を「半死半生」にして部屋に拘禁したという成親逮捕の物語的伝承が、『愚管抄』との共通資料として想定できるのである。

『平家物語』が本来は厳しく成親をあつかっていたとする資料を、やらせの拷問として描き変えたのは、鹿谷事件を語り伝える物語的な伝承(行綱の密告の伝承や成親逮捕の伝承など)を、清盛と法皇の対立という明確な構図に組み入れたためであろう。清盛と法皇との対立の構図は、繰り返し述べたように世界を支える二つの柱の互

解としてこの世の乱れを描こうとする『平家物語』の構想であった。¹⁷⁾ その構想から日本国大将軍たる賢者重盛像が生み出されていることはいうを待たないだろう。重盛は、この事件の直前の殿下乗合事件において、「…設ヒ入道イカナル不思議ヲ下知シタマフトモ、争カ重盛ニ夢ヲバミセザリケルゾトテ、行向タリケル侍共十余人、被勸当ケリ」(延慶本第一末十六「平家殿下二恥見セ奉ル事」と描かれているのであるから、重盛の小姑に当たる成親を拷問せよという清盛の命令には待たちはすくさま従えない。『平家物語』諸本が不自然な成親拷問の叙述を見せるのは、清盛・法皇・重盛という物語を構造的に支える人物の構想が、物語の資料としての伝承を採り上げの際の叙述のあり方を暗示しているといえようか。語り系諸本が、「小松殿の御気色いかゞ候はんず覧」(寛一本巻第二「小教訓」と清盛の下知に躊躇する武士を描き、「よしく、をのれらは、内府が命をばおもうして、入道が仰をばかろうしけるござんなれ。其上は力及ばず」(同前)とすねる清盛を描きながら、そのためにやらせの拷問が行われたとこの場面を再構成して語るの、おそらく語り系の本文が前提にしていたであろう本文(延慶本的な本文であろう)の不自然さをやわらげる文芸的な処理からであろうが、その語り系の本文のあり方は、延慶本で見た物語の資料を物語化する際の構想を、まさに表現のレベルにおいて際立たせたものだろう。

注

- ① 延慶本本文は北原保雄・小川栄一氏編『延慶本平家物語』(勉誠社)による。
- ② 梶原正昭氏「『平家物語』の一考察——『鹿の谷』と白山事件——」(『早稲田大学教育学部学術研究』昭和三十六年一月「日本文学研究資料叢書 平家物語」有精堂所収)
- ③ 寛一本本文は梶原正昭・山下安明氏校注『新日本古典文学大系 平家物語』(岩波書店)による。
- ④ 四部本は卷二欠卷。
- ⑤ 拙著『平家物語の基層と構造』(近代文芸社)
- ⑥ 拙稿「平家物語」の構造と説話の文脈」説話と説話文学の会編『説話論集』第二集(清文堂)
- ⑦ 拙稿「文覚説話の文脈」水原 一氏編『あなたが読む平家物語? 平家物語 説話と語り』(有精堂)
- ⑧ 拙稿「代の乱ける根元は」考」水原 一氏編『延慶本平家物語考証二』(新典社)
- ⑨ 行綱が目を打しただいたとする句は、屋代本等八坂系の語り本にはおおむね無い句だが、長門本・盛衰記には見られる。
- ⑩ 拙稿「先帝入水伝承」の可能性」『軍記と語り物』第二四号(一九八三年三月)
- ⑪ 延慶本は、西光を鹿谷の謀議記事の冒頭の名寄せの部分に「左衛門入道」とのみ記し、酒宴の場面には描かない。酒宴の場面に西光を登場させる語り系諸本は、鹿谷事件に連座した物語の主人公たちをここに一挙登場させ、物語の伏線としたものだろう。延慶本の記事の古態性については論証する紙幅がないが、水原 一氏が名寄せ記事から「左衛門入道」を脱落させている語り本系のあり方を後の本文として指摘している

〔新潮日本古典文学集成 平家物語〕上 八六～八七頁頭注) ことや、法皇を登場させないなど改変著しい四部本の本文が「鹿谷山莊紹介・名寄せ・行綱白布記事・酒宴俊寛出自記事」というように、延慶本の本文の骨格をととめている点などから十分推測できる。

⑪ 『愚管抄』本文は、岡見正雄・赤松俊秀氏校注『日本古典文学大系 愚管抄』(岩波書店)による。

⑫ 同⑪補注にも延慶本との共通本文を考えるべき指摘がある。

⑬ 盛衰記は、鹿谷の謀議の場をこの行綱の密告記事の中に移動させるような本文の改変をしているが、密告の場所を福原としている。

⑭ 武久・堅氏「大納言物語」の様式と展開『平家物語成立過程考』第四編第二章(桜楓社)

⑮ 水原一氏は『新潮日本古典文学集成 平家物語』上 八五頁頭注で鹿谷の謀議の場における静憲の傍観者的視点を指摘している。

⑯ 同⑥

⑰ 同⑥・⑦